

tab

No.
36

2
0
1
2
/ 12
/ 15

木村和史 / 野村 龍 / 長尾高弘
福島敦子 / 岩田英哉 / 水島英己
秋川久紫 / 中村剛彦 / 吉田群青
倉田良成

糖 = *Machilus thunbergii*

cont.

詩篇

- 岩田英哉：老子は青い牛に乗って／01
野村 龍：殻／02
中村剛彦：生誕の夜／04
秋川久紫：副都心パラドックス／06
福島敦子：沈黙／07
長尾高弘：として・一日の始まり／09
吉田群青：その翌朝／13
水島英己：燈台へ行く道／14
倉田良成：鳴鞭過酒肆・巫女たち／16

文

- 木村和史：台所が欲しい／19
中村剛彦：象徴の魔力 五／21

あとがき集／25

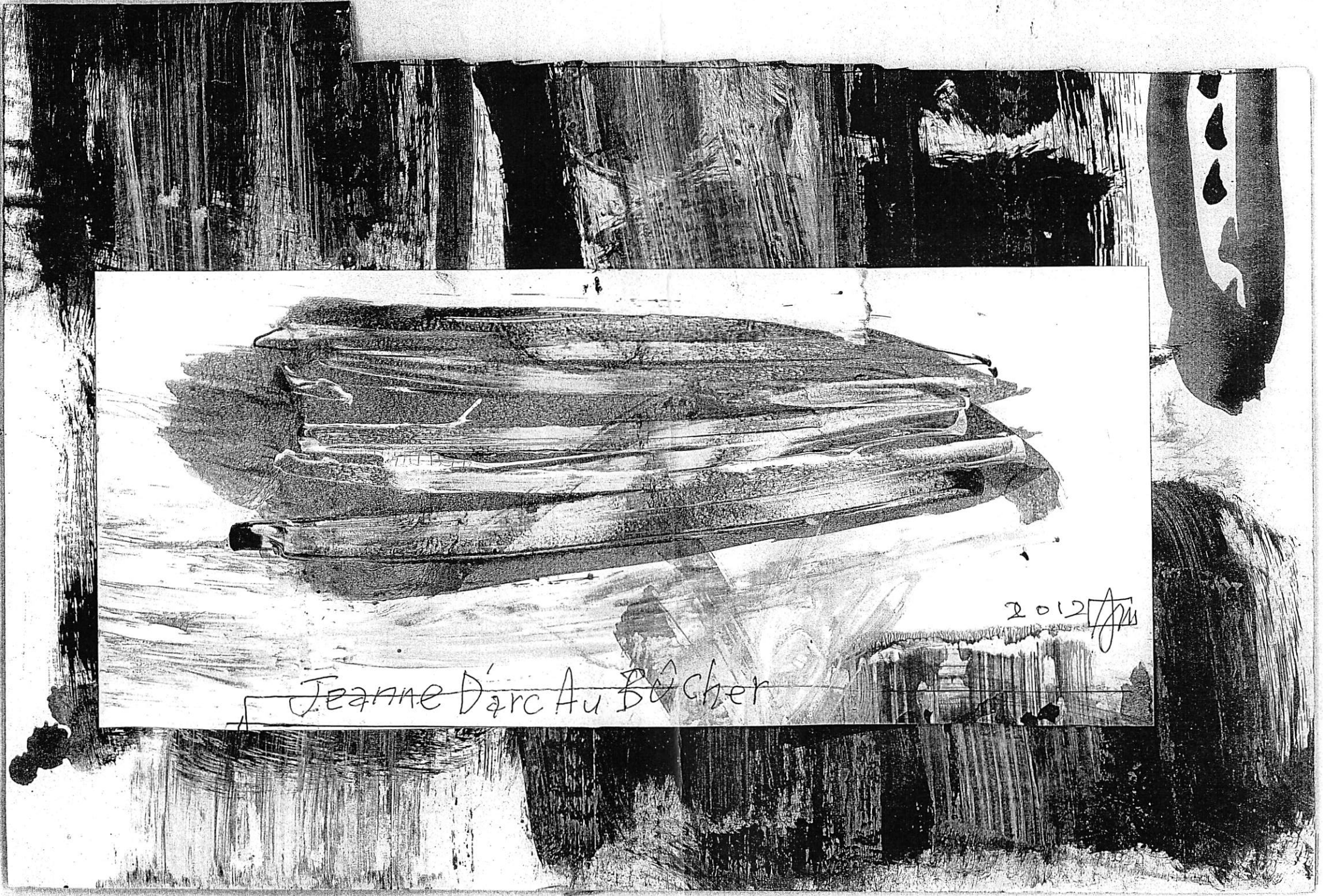
画：和田彰

125 第36号／2012年12月15日

編集発行人／倉田良成

〒2330-0078 横浜市鶴見区岸谷4-25-25 鶴見岸谷ハイツ 201

Eメール／kateis111@k3.dion.ne.jp



Jeanne D'arc Au Bûcher

2012 [Signature]

岩田英哉

老子は青い牛に乗って

老子は

青い牛に乗って

揺られながら

函谷関を出

西へと歩み去る

老子の惜別は

老子の純粹であり

いつも思考の筋道であった

いつも思考の経路であり、理路であり

宇宙を理解するための法理であった

(思考の跡は、水のように輝いている)

玄の玄、これ衆妙の門なり

門を出でて、門に入り

門に入って、門を出る

胎内巡りの長い長い旅であった

(幾たび、わたしは生まれ変わったことか)

そうして、その旅も、とうとう終わりに来たのだ

さようなら

と行って、彼は

最後の門を閉じた

(遠く、青い牛に乗って) June 21, 2012

野村龍

殻

いつ 滴りはじめたのか
しっとりとした 雫

或いは涙を 蕾に押し込んで
扉の鍵を外す

神は 宙空から展開し
瞳を たちまち雲で包む

剥き出しの宝石と胡桃とが
掌のなかで ごりごりと触れあうとき

パウロは悲しい雷に打たれ
最後の本が開く

《志田恵里さんがすきでした
脳が 煮えたぎってしまうほどに》

ゆらぐ光に 笑顔が刻まれ
もう 癒えることもない口笛

遠ざかる指輪のなかで
濡れた巻き毛が揺れる

ところが壊れるのを
木の葉は封じ得なかった

雨が降り始め

方位磁針は ゆたかな錯乱に陥る

それでも

光は ひっそりと 汚れなかった

中村剛彦

生誕の夜

靴紐を解こうとして

闇に沈んでいく孤独

冷たい扉を背にし

コンビニで買ってきた焼酎を片手にぶら下げ

あなたがいない部屋を見つめると

湿ったシーツの皺だけが

傷のように明滅しはじめる

「もうすぐクリスマスだね」

「そうだね、今年はこれを聴こうか」

あなたがこの部屋にいないのは

あなたが死んだからと

何度も口の中でくりかえし

ようやく紐は解かれる

レコードに針を落とし

ベッドに仰向けになって

ランプの光に浮かぶ天井の染みを見つめる

もう何も思い出せない

あの海と あの犬と あの夕陽と

すべてわたしの頼りだったあの笑い声と、

「あなたより先に死にたい

あなたの死を見たくないから」

あれはなんだろうかと

一点の黒い染みを凝視する

痛みもなく 深く さらに深く 摩滅しつづける闇

あなたが買ってくれたスピーカーからとどく鐘の音に蒼褪め

独り言をくりかえす

誰ガ生誕ニ祝福アレ、

誰ガ生誕ニ祝福アレ……。

副都心パラドックス

誤って迷い込んだ妖狐の館から逃れるために、不動明王にどれだけの黄葉を払ったのかは覚えていない。深傷を負わずに難所を切り抜けるために、何も八稻妻の機転Vとか八白蛇の制御Vが絶対不可欠と言うほどのこともないだろう。官能の黒地図をどれだけうまく塗り分けたところで、所詮、陰惨な鼓笛隊の行進を止めることなどできないのだから、何時だってスマートに季節を手渡す術くらいは心得ておいた方がいいだろう。悪計の姉だと名乗っていた頃の悦楽とは良く馴染んだものだが、当の悪計が留置所に入るなり、実は「妹だったのよ」と告白された時にはさすがに参ってしまった。

百鬼たちと夜ごとの乱舞を続けていくことと、八与件としての枳Vを黙って受容することは、どこまでも等質であり、なおかつ奇蹟と見紛うばかりに等価だ。それは、性格俳優の平泳ぎとレントゲン技師の咳払いほどにも近しく、理不尽と互角の強度を備える。

歌舞伎町の路上では、邪氣が行き倒れたり、無垢が不用意に発砲したりしないよう、安穩の天使たちが『喧嘩上等』を演目に取り上げようとしている。果実から元本へと変貌を遂げた手負いの妖狐が、その間隙を縫うように、正当な貴人として通り過ぎていく。

時代の遺書には「できることなら、訓読みの名前で呼んで欲しかった」とあるが、執行人は長く行方をくましましたままだ。この街で普賢菩薩に出会い、二度と訪れることのない至福のひとつきを過ごしたことは誰にも話していない。それは、ミントティーを浮かべた骨壺の内側から森羅万象を眺めるような刹那であり、あるいは憂いをたたえた大鷲となって日月星辰に甘えるような白昼夢だった。この街の売り物は、八美装Vと八悔恨Vとギブスくらいしかないのだから、漆黒のメッセンジャーバッグに赤いカラスを忍ばせておくようにでもないかと、往来を自由に歩くことすらままならない。

福島敦子

沈黙

父の手が冷たい
たらいにお湯を入れ ラベンダーの精油を一滴落とし
両手を浸させた

いい香りがするだろ？

うん：

暖かいタオルで顔をふき

目やにもふき取った

顔の皮膚がぼろぼろとこぼれるので

オルビスの保湿ジェルを塗った

足がかさかさなのでオロナインを塗った

鼻くそをティッシュを添えて

取った

今日 父は

帰りたいとは言わなかった

黙っていてくれた

父の顔はつるつるになって

光っていた

沈黙はいい

ほっとする

心苦しさをやわらげてくれる

その奥に伝えたい気持ちがあったとしても

として

食べ物として売っている。

食べるとうまい。

うまいのは快樂だ。

さらなる快樂を求めよと身体が要求する。

身体の要求に従えば、

次々に食べることになる。

そのような食べ物として売っている。

ただ、毒が入っているかもしれない。

よくわからない。

入っただけでもすぐに死ぬわけではない。

かならず具合が悪くなるわけでもない。

はつきりとわからないような仕組みになっている。

わからないのですとぼけることができる。

都合のよい条件だ。

気にしてよくよしていると、

かえってその方が病気になるりますよ、

などと言っている。

大きなお世話です。

そんなに律儀に気にしてられません。

ただまったく忘れることもできないだけ。

犬の糞を踏んだときのように、

ぐにゃつとしている。

これが現代文明の成果です。

As such

Sold as food.

Eat it and tastes good.

Good taste is pleasure.

Body demands more pleasure.

Pursuing the pleasure,

you eat more and more.

Sold as such food.

But it might contain some poison.

Not sure.

If it does, you won't die so soon.

You won't always fall ill.

But you might.

No one knows. It works as such.

So, you can pretend as if there is no such thing.

It's so good for you.

You can say "If you excessively worry about it,

you will fall ill with that worry".

None of your business!

I can't be so diligently worried.

But, either can't I forget it altogether.

As uncomfortable as when you tread on dog's shit.

That's the fruit of modern civilization.

一日の始まり

朝のテレビ画面は、
スタジオから西宮の海の風景に切り替わった。
尼崎の事件に関連して、
容疑者が捨てたと言っている
スコップかなんかを探すのだそうだ。
海には警察の船が浮かんでいる。
手前は岸で、報道陣が何人も固まっている。
岸の少し先には、警察関係者が数人いて、
潜水士が海に飛び込むところが映し出される。
昨日は天気がよかったのに、
なぜ雨のなか、こんなことをやっているのかね？
日曜で休みだったのかな？
そもそも今日こんなところで捜索をするなんて、
ついさつきまで知らなかったぞ。
報道陣はなぜ知っているんだろう？
マイクを持ってレポートしている人は、
毎日全国のおちこちに行っている人だぞ。
朝早くにあそこにいるということは、
前日の夜くらいにはわかっていたということだよね？
マスコミというところには、
警察から電話がかかってくるのかな？
明日西宮の海で捜索をやるよ。
来たかったらおいで。
お上でももつと丁寧にしゃべるのかな？
電話じゃなくて直接言うのかも？
でも、警察が教えてくれなきゃわかんないよねえ。
じゃなきゃ全部のマスコミが揃っていたりしないだろう。
そのくせ、警察はマスコミなんか知らないというふりをしているね。
ちよつと離れたところにマスコミを隔離して、
でも、映しては欲しいから映るところにいるんだね。

お知らせしてもらったマスコミの方でもちよつともめるんだらう。げつ、明日はほかのことをやるつもりだったんだけどなあ。でも、顔を出しておかないと、警察が連絡してこなくなるぜ。もつと大事なときに置いてきぼりを食らったら大変だよ。しょうがないなあ、犬山さん（仮名）、西宮行つてくれる？でもつて、今日は雨だから、潜つても先が見えないようなら中止するんだそうだ。テレビはしばらくほかのことをやって、番組の後半でまた海の風景に切り替わった。やっぱり今日は止めたそうだ。すべてが無駄な時間だったなあ。

その翌朝

八月も半ばを過ぎた翌朝

ちいさな町は　それまでのごたついた霧囲気を喪い
いやにさっぱりとする

大通りは

風紋がいく筋もついた砂漠のように
さらさらと留めどなく風に吹かれて

朝刊を取りに

下のポストまで降りてゆく途中

はんぶん透けたひととすれ違った

ああ　還れなかったんだな

何とはなしに見送った

俯きながら階段を上がるそのひとは
俯いたまま壁の中へと消えていった

下まで降りきると

既に淋しいぐらい陽射しが強くて

がらんどろの空を

白い胸をきらめかせながら

音もなく飛行機が横切ってゆく

燈台へ行く道

―現存するものを、破壊的性格は瓦礫にしてしまうのだが、それは、瓦礫のためにはなく、その瓦礫のなかを貫いて通る道のためになす業なのだ。破壊的性格が生きているのは、人生は生きるに値する、という感情からではなく、自殺は骨折りがいのないことだ、という感情からである。― W・ベンヤミン

きみは動きや息や、その予感さえも、あまきものの階梯と呼び、わたしにはそれらは容易には保ち得ない、わたしは命の腐葉土から切り離された干からびた塩田だからと告げるが、死児の泣き声を幻に聴く耳や鉛色の空に凍りつく視線は苦みを帯びてはいても、始まりとは言えないのだろうか。

小雪降る平日。初老の男が電車に乗り、高尾山口で降りた。寒い。男は販売機で水を買って、デイパックに入れ、稲荷山コースを登る。上り90分とあるが、ぬかるみの道で、かなり時間がかかりそうだ。サリンジャーなら、ここからどんな短編を作るだろうか。

男女が入れかわり、生まれかわる。王子は姫に、姫は王子になる。寒さの底で、傷は唇に変わり、唇は声の廢墟になる。呼ぶ声と応える声が凍ったまま遠い星空から落ちてくる。この恋は不可能だと呟くと、カチンと割れて見せた。その中からシチリアの無花果が飛び出た。

―ときにぼくたちの後ろにあるもの（きみにはわかっている、詩のことだから）闇なるもの、そのなかで生はみずから輝く。―（「ギニア」より・パゾリーニ詩集・『薔薇の形をしたポエジー』四方田犬彦訳）

成瀬の伊勢神、町田の柿島屋、相原の「毎度」。横浜線の居酒屋を辿る細道。ほどかれた結び目での微笑と希望。きみはよく知っているよね、その細道は詩へと続く道だったから。つらい20世紀を復習した後で、真の自由詩が始まる予感。女神が袖を振って招いて

いたのを。

マルセイユに集まった子どもたちは何を夢見ていた？海が割れるのをか。夕焼け空の遥か彼方に聖地があり、異教徒たちがそこを蹂躪していた。12歳のステファンは何を願った？ 熱狂と陶酔、神の兵士たち。クリスマスの日、エルサレムを夢見る子どもを捜しに行く。

燈台へ行く道の水仙の群落。風に揺れる小さな花々の白と黄の点滅。伊豆大島、利島、新島、式根島、神津島……。島々の青い命を際立たせる透明な冬の空。寒風のなか、夜の海を照らす光を想像する。「宝島」の作者の父がああ岬の燈台を設計したって知っていた？

距たりを刻みながら近づく流星、つねにすでに逃れざる「存在」のきらめき、償えない不均衡のなか、ミーナのように歌うしかない、なにもわからない、うずくまって泣いている、波、丈高い一本の松の臨終、帰ったのだろう、流れたのだろう、いつまでも待つ人のもとに。

倉田良成

鳴鞭過酒肆

いつもは東京で飲み歩いている連中が、あらためてこの街に来ようという気になって、サクラギ町で待ち合わせ、華人街まで徒歩で行って、モトマチからヤマテにつづく丘に上がった。東京から来るのなら、Yの巨大駅で乗り換えてイシカワ町まで来るのが理屈に合っているのだが、そんなことにはおかまいなくY浜という街を全身で感じたいというのだから、生意気盛りとはいってもかわいものだ。全員がはたちをわずかに過ぎたころで、奇妙なストイックさをこころのうちに蔵していたが、おりしも三月尽、丘の花の木が満開を迎えていた。われわれはモトマチの丘の急坂を息も切らさずに登りきり、眼下に港が見えるという公園や、Y浜ヤマテ館、外国人墓地が出遭う変形三叉路のあたりを、おのぼりさんよろしく見て歩く。すぐそばを根岸線が通っていて、ほとんどその鉄道沿いに、路の両側のおびただしく白く光る花の群れの下をヤマテ駅までたどっていった。途中にあるF女学院には、むかし小学生のときに同級生だった女の子が通っていたが、そのままいったとして、すでに卒業するかしないかの年頃だったろう。まあいわゆる「よくできる子」であったが。丘を下って行く中腹のあたりには花筵が敷かれて、もう夕刻となり、あちらこちらで花見の宴会が始まっている。俺たちはこういうのはやらないんだ、と、さいしよはその禁欲的なポリシーに従っていたのが、だれかが自動販売機でビールのロング缶を購入したのをきっかけにするように、やがててんで手にロング缶をぶらさげて、なかにはカップ入りの日本酒を携えるものも出てきて、ぶらぶらと総勢で花の下を遊歩した。これって花見ってことじゃないかとだれかが言い、これは俺たちが初めてやる花見と認定せざるを得ないと別のだれかが言った。それは少し恥ずかしく、それよりもほんのちよつと誇らしい。元服や着袴の儀のように威儀正しく、それとは別の側面から言うならば、ある意味で、まるで厳しい成人戒イニシヤンのように残酷なものでもあった。このことは、花の下、まわりで浮かれ踊っているすべての大人たちの顔に、刻まれたようにその疵跡が烙印されていることから知れるけれども、そのことに、われわれの、まだだれも気づいていない。

鳴鞭過酒肆

絃服遊倡門

百万一時尽

含情無片言

馬ニムチウチサカヤヲスギテ

綾ヤ錦デゼヨロヤニアソブ

タツタイチャニセンリヤウステテ

カネヲツカツタ顔モセヌ

* 儲光羲「長安道」、井伏鱒二訳、『厄除け詩集』より。

巫女たち

イセザキ・モールの通りや、オー川の橋のたもとなどによく出現したという、伝説的なホームレスの老女がいて、Yの県民ホールほかで彼女を主人公にした芝居が上演されたことがあったほどだった。メリーさんと渾名された彼女は、じつさいに目撃した人間の話によると、歌舞伎役者のようにおしろいを分厚く塗ったマスクで、濃いアイラインを引き、薄汚れてはいるが十九世紀の西欧貴婦人みたいな白いドレスで盛装して、夏には日傘なんかをさして群衆の中、世人の好奇の眼にさらされるのをむしろ誇るように歩いていたという。まるで卒塔婆小町か落魄した清少納言さながらの説話を思い起こさせる彼女は、結婚したことがあるとか、関西地方の料亭の仲居であったとか、進駐軍相手のパンパンのオンリーさんのなれの果てだとか、そのまたなれの果ての街頭に立つ下級娼婦だとか、いろいろに言われていたのだが、いずれもその奇態な風体によって掻き消されるように、真偽のいっさいは吹き飛ばされてしまっている。そういえば、オオノカズオという有名な舞踏家も、踊るとき風の風体化粧は彼女そっくりで、彼が同じくYに住む市民であったことを鑑みると、あなたがちメリーさんの存在とまったく無縁というわけでもなさそうだ。メリーさんはいまから数年前に八十幾つとかで亡くなったという。メリーさんが隔絶した個性であったとしても、彼女を生み出したこのYという街の風土は、メリーさんの姉妹や娘や孫娘たちを続々と簇生させている。二十世紀が終わったばかりのころ、巨大なY駅の西口をよく利用したもののだが、そこで、定位置ともいえるポイントに必ず一人の女ホームレスがいた。メリーさんのように化粧こそしていなかったが、ひらひらのフリルのついたピンク色のロングドレス——というよりは、まさにロリータそのものの、お姫様みたいな、しかし垢じみたドレスを着た、年のころは三十代から五十代までの幅をもつ、もうおばさんと言ってもよい小肥りの女なのだった。何かぶつぶつと呟いているのは、心に問題でも抱えているのか。ときおり空を見上げては、なんともいえない厭な笑いを漏らすその表情は、かつて私がY市からはるかに離れた地方の精神病院で目撃した、「空そら」と呼ばれる統合失調の病態にまぎれもない。ある夏の深夜など、例の定位置におおむけになつて、お姫様ドレスはそのまま、だが胸も露わに両の乳房をはだけて、空笑しながらいびきを上げていたのを見た。通行人は誰も彼女のほうを見ないのだった。彼女はいま明るいところで眠っているが、このまま駅の終電の時が過ぎ、寝場所を移した彼女には、どんな凄惨な暴力と闇と恐怖が待っているのだろうか。また別のあるとき、西口の百貨店地下の食料品売場に入ったのだが、そこでは試食をさかんに勧められた。それを断りながら売場を見てゆくと、とある老婆とその縁者らしい若い男の二人連れが目についた。若者のほうは、どうやら知恵遅れらしく、老婆のてきぱきとした指図に茫然とした表情で忠実に従う。彼らはつまり次々に試供品を試食していつているのだった。だが白い三角巾を被った売り子の顔がなぜか曇っている。二人連れに近づいてみて、初めてそのわけが分かった。二人の躰からすさまじい臭いが立ちのぼっているのだ。彼らは臭うだけで、ものを盗るわけでも、営業を妨害するわけでもないから、警備員も追い出すことはできない。ただしその悪臭は、この世で私が体験した嗅覚の中でも、最悪の部類に属するものだった。人間とは、かくも高貴になれるものなのか。老婆とその若者を見て、彼ら聖家族の還るべき天空、そのなつかしい家郷を同時に見たように思った。彼らは腹を満たした

あと、西口の駅に戻り、シャッターが降りるまで、家にいられなくなった金髪の家出少女や、クスリでふらふらになった聖者たちと、秋の、圧倒するしろがねの夜をともに過ごすのだ。

"Shirokanipe ranran pishkan, konkanipe
ranran pishkan" arian rekpo chiki kane

(訳)

「銀の滴降る降るまわりた、金の滴

降る降るまわりた。」という歌を私は歌いながら

*「アイヌ神謡」泉の神の自ら歌った謡」より、知里幸恵訳。

台所が欲しい

家をつくり始めて5年目のシーズンが終わろうとしている。当初の計算ではとくに母屋が建っていて不思議はないのだが、計算はとりあえずゴールに向かって一本の線をまっすぐ引いたようなもので、その線には、予想外のことが起こる可能性も含めていないわけではなかったと思うけれども、これほどまっすぐでない線が引かれるとも思わなかった。気持としては、ゴールが変更されたというより、ゴールそのものが消滅したような感じになっっている。

今のところ建物としては、6畳の寝泊まり小屋、その下屋として作った3畳の土間、寝泊まり小屋をはさんで土間と反対側に3畳の物置、友人が図面を描いて骨組みの作業も手伝ってくれた、18畳ほどの単管組みの倉庫、その倉庫にくっつけてやはり単管でつくった12畳ほどの作業小屋、それから小さな温泉風呂の小屋、の6個ということになる。ほかに、隣人に譲ってもらったカラオケルームがある。これは入り口に赤い布の小屋根が被っていたりして、わたしの思いとは肌が合わないのだが、壁が防音になっているし、残念ながらこの建物が一番頼りがいがあるかも知れない。トイレは工事現場で使う仮設トイレをもらったので、それを汲み取りではなく、実験的なバイオトイレとして使っている。

こんなに時間がかかるとは思わなかったのだ、母屋ができあがるまではなるべく粗末な仮施設のまま、不便をしのぎながら生活するつもりだった。柳の枝を組んで端材の板を打ち付けただけの風呂とか、ブルーシートを被せた最初の小屋とか、通りすがりの人の目には、河川敷のブルーシートの小屋とそれほど違わない風景だったと思う。

そういえば、もうずいぶん前のことになるが、多摩川の河川敷を歩いていて、雰囲気

ある小屋を発見したことがある。植木屋が竹垣を組むように、葦をきれいに束ねて壁にした小屋だった。枯れた葦原に、葦の影のように紛れている葦の壁の小屋には、軽やかな余裕のようなものが漂っていて、その頃はまだわたしの家作りは頭のなかになかったと思うけれども、この小屋からわたしの家まではそう遠くないと感じたことを覚えている。この材料なら、わたしでもこんなふうの家をつくる。あの頃からわたしの思いの中には、葦の壁の小屋のような夢が潜んでいたのかも知れない。廃屋とか、凍結で土台が傾いているのに今もまだ人が住んでいるらしい家を目にして、自然に気持が立ち止まる理由をとくに考えたことはなかったけれども、地面とつながっている感じに惹かれていたらしいと最近になって思うようになった。いつのまにか地面から生まれていて、崩れたあとはまたいつのまにか地面に消えている。人が生きている間だけ、姿としても役割としてもその家に命が宿り、人がいなくなると魂の抜けた廃屋になる。

住居というのはどこまでが住居でどこまでが生活か、昔の農家は土間があつて庭があつて、畑があつて入会地があつてというように、生活の空間と地面がずうっとつながっていた。ほとんどの貧農の家は、もつとじかにつながっていたと思う。屋根が茅葺き草葺きだとすると、地面を逆さにしてかぶっているようなものだ。良くも悪くも、とにかくつながっていたのである。

写真などで見る里山のそのような風景と、実際にわたしが育った土地の様相はずいぶん違っているのだが、なんだか懐かしい感じがするのは、わたしの家がかつて町役場の物置だった木造の平屋で、風呂は父がどこからかリヤカーで運んできた五右衛門風呂で、煉瓦

で手作りしたペチカがあつて、というような、継ぎを当てたような生活だったからかも知れない。きれいなサイディングの外壁でしっかりと囲われた最近の家は、わたしがもつと若かったら目標にしていた可能性もあるけれども、今となつてはなんか違うなと感じるだけだ。

百年もつ家を目標に設定して、あれこれ意気込んで本を漁ったはずなのに、結局、地面の上でわたしとともに自然に朽ちていくような家を目指している感じになつていく。

いつからそんなふうになつて、心境の変化が生じたのか。幾つかの突発的な出来事に足をとられて、何回も急ブレーキを踏まざるを得なかったことが原因しているのかも知れないし、単純に、5年もだらだらやってきてモチベーションが減少しているということかも知れない。今は落ち着いているが、老人ホームに入っている両親になにかあつたときには現場を放棄しないといけないので、布を広げて品物を並べ、警官の姿が見えたら布を畳んで撤収する、路上の物売りに似た気持も幾らか混ざつていような気がする。

しかし一番大きな理由は、阿寒の渡辺さんから大量に古材をもらったことではないかと思う。神社やお寺を建てていた釧路の建築会社が倒産して、たまたまそこからいろんな材料が手に入ったことも、それらを利用せざるをえない方向に考えを進めるきっかけになつた。古い家を解体した四寸角の柱70本とか、10センチのグラスウール8巻とか、杉の突板の新品の天井材とか、大きなペアガラスの窓とか、わたしの小さな家一軒分には余るほどの材料が揃つてしまつたのだ。

最初の年に新しい木材で6畳の寝泊まり小屋を建て、それはそれで満足していたはずなのだが、もらった古材でばたばたと物置を作つたりしているうちにそつちの味になじんできて、今ではすっかりそつち側の人間になつてしまつた。古い穴の開いた、部分的に腐れが入っているような柱を、見物の友人たちの目に触れさせることになんのためらいもないのである。友人たちも、心配するよりは

圧倒的に、材料を賞賛していく。

それから、不慣れた暮らしを5年も続けていると、必要なものを少しずつ足していくだけで、なんとかなりそうだな、という人生観みたいなものもできあがつてくる。

たしかに不便はいっぱいあつて、不便をそのまま放置するわけにはいかない。いつ、どの程度まで便利にしたらいいかを工事計画に組み込む必要がある。しかし、わたしの気持はもたもたしていて、便利がなかなか絶対目標になつてくれない。

不便を少しだけ便利にしながら、日々の暮らしと折り合いをつけてきた5年のあいだに、不便だ便利だと感じた途端に不便と便利が追いかけてこを始める、ということがなんとなく見えてきた。便利にはきりが無い。まわりの人間にはわたしの不便がはつきり見えるらしくて、早く早くとしばしば急かされるのだが、その声によつて便利に到達しようとする意気込みが鼓舞されるといふふうにならない。

なにをもつて不便と感じるかは、本当はわたしの心ひとつにかかつている。わたしの心がどこかで切りをつければそれで済む。落しどころというのだろうか。わたしという人間と、わたしの過去現在の生き方が、この程度の便利さで十分じゃないの、と自然に判断する境界線があつて、そこに気持を寄り添わせるだけでいい。その境界に、こんなふうになんて生きていきたいと希望する幾つかを付け加えれば、わたしの十分な未来ができあがりそうだな。とはいえ、落しどころの見極めが意外と難しい。

例年なら、11月中旬には東京に引き上げていたのだが、この冬、痩せ我慢をして雪の中でも仕事をしてみようと決意した。ただ、水道が敷地のはじっこにあつて、ストーブのある土間から約20メートル、往復すると40メートル歩く計算になる。水道まで辿り着くのには雪かきが必要になる日もあるだろう。流しがあつて、自由に洗いや調理ができて、という便利が心から欲しい。

象徴の魔力 五

「詩作にはすでに興味を失っていた。かれ自身としても詩人になろうと思いたったのが間違いのはじめで、詩だけを思うままに作っていたればよかつたのだと、老年になつたかれはしきりに悔んでいる。その上に他の一しよになつて物を言うのをひどく忌むのである。詩社を結ぶなんぞということは、てんでかれの頭がない。一生涯孤立は避けられもせず、また避けようとも思わずに、別にしでかしたこともなく、ずるずると今日に及んだのである。」（「書冊の灰」）

以前も引用した蒲原有明晩年の自伝小説『夢は呼び交す』（昭和二十二年）の第一章の言葉であるが、最近再読しながら、この詩人の「詩人」なる存在の宿命の述懐にいたく共感する。また同じ文章の中で自らの才能について、

「かれはこの叙情の才に欠けていることを、詩人として立つ上において殆ど致命的であるかの如く思い詰めた。題材は自然、神話、伝説にわたつて、各々異なつてはいたが、事象の取扱はいずれも外面的で、どうやら合理的科学的な方法への傾向を持っていた。その上にも時事問題にまで心を牽かされていた。それはそれで調和が取れていれば好かつたが、ただわけもなく雑然と混糅していた。」

と述懐している。老年期に至つての多少の謙虚さをも含まれようが、実際にその詩を読んでみれば、なるほど、と頷けるところもある。

「苦惱」

伝へ聞く彼の切支丹、古の悩みもかくや

影深き胸の黄昏、密室の戸は鎖しもせめ、
戦ける想の奥に「我」ありて伏して沈めば、

魂は光うすれて塵と灰「心」を塞ぐ。

慎ろしき「疑」は、噫、自の身にこそ宿

れ、他し人責めも来なくに空しかる影の戯わざ

こは何ぞ、「畏怖の党」群れ寄せて我を囲む

か。脅す仮の装ひに松明の焰つづきぬ。

聖麻利亞、かくも弱かる罪人に信の潮の

甦り、かつめぐり来て、「肉」の渚にあふれ、
俯伏に干瀉をわぶる貝の葉の空虚の我も

敷波の法喜伝へて御恵に何日かは遇はむ。

さもあれや、わが「性欲」の里正は窺ひ寄り
て、

禁制の外法の者と執ねくも罵り迫り、

ひた強いに踏絵の型を踏めよとぞ、あな浅ま
しや、

我ならで叫びぬ、『神よ此身をば磔にも架け
ね』と。

硫黄沸く煙に咽び、われとわが座より転び
て、

火の山の地獄の谷をさながらの苦悩に疲れ、
死せて又生くと思ひぬ、——夢なりき、夜の
神壇、

蠟の火を点して念ず、仮名文の御経の秘密。

待たるるは高き漏るる啓示の声の輝き、——
信のみぞ其証人、罪深き内心ながら

われは待つ、天主の姫が賛頌の声朗かに
事果て、『汝を恕す』と宣はむその一言を。

日本近代象徴詩の最高峰『有明集』（明治四十一年）中で、私が最も愛誦する詩の一つである。確かに有明自身が言うように、「叙

情」はなく、また「題材は自然、神話、伝説にわたって」いるとも言えるが、ただ知識でのみ書いているとは到底思えない。真骨頂とも言える「絶体絶命の性欲」（「夢は呼び交す」）から迸る独特の暗黒の詩魂はここにも渦巻いており、キリスト教「倫理」から逸脱する己の実存の傷を見事に詩語化し象徴化してみせていると言える。むしろなら「叙情」がないところこそが、有明詩が有明詩である所以であり、象徴詩の完成度を極めさせた大きな要因であることは確かであろう。

いま私は「詩語化し象徴化」と、やや軽はずみに記したと思われるが、実は有明詩のすべての謎はもしかするとこの一点に帰するとも言える。つまり詩人自身が「叙情」の才のないことを踏まえた上で、何をもって詩を書きつづけ、前人未到の象徴詩の領域を切り開いたか。これもまた先の述懐につづいて、「……そこに気がついてから、それを苦にして漸くにしてたどりついたのが言葉の修練ということである。先ず自分に欠けている情趣を自分のなから作り出そうという考えに到達した。」

とある。そして、「言葉の修練を積むに従って詩の天地が開闢し、やがて「好奇と驚異、清寧と冷徹——詩の両極をなす思想が、かれを中軸として旋回しはじめるのを覚える」とある。

しかし、ここまでは現代でも詩を書く者であれば誰でも当たり前のことだと思うところであろう。何も象徴詩でなくても、自由詩でも、あるいは「現代詩」でも、みな「言葉の修練」を怠っているわけではない。私自身もそうだ。しかし先の詩「苦惱」一つとってみてもいい。そのごつごつとした語のぶつかり合いによるリズムの連鎖と亀裂が一見極めて難解に見えるが、実のところ一つ一つの語をゆっくり見詰めれば、それぞれは正確に「意味」を付与された通りに示されており、その語と語の振じれた連鎖は、逆に読者にある統一した世界圏への道をしっかりと示していることもまた事実である。それは最後の行の

『汝を恕す』という「啓示の声」にまで一直線に引かれている。「物語」は極めて単純である。はじめに「伝へ聞く彼の切支丹」でキリスト教的世界圏へ読者を誘導し、かつその者が信心への「疑」を消すことができず、「聖麻利亜」への禁じ得ない「性欲」に悶えながら、その罪のために「死せて又生く」という自己矛盾の試煉を己に課して、せめて最後に神の「救済」の声を待つ姿を描いたものである。

この宗教的「倫理」からの性欲による追放劇は、蒲原の象徴詩には数多く用いられるモチーフであるが、どうしても気になるのは、なぜこの「禁制」の物語を語るために詩人はわざわざ「言葉の修練」を重ね、「象徴詩」を生み出さねばならなかったのか、ということである。もっと言えば「叙情詩」を書けない詩人が、なぜ「象徴詩」を書いたのか、これは単に詩人の資質の問題にだけ帰してしまつてよい問題であるのか、という問いが生まれる。同時代に生き、交流もした「叙情詩人」島崎藤村との比較など一度考えねばならないところであるが、ここでは話を別に進める。

いま、この「詩語化」——「象徴化」の問題で気になるのは、むしろ明治以降の「日本語」の変遷である。詩人は別のところで妙な事を言っている。

「気に留めねば何でもないことであるが、自由詩の障碍は最初からその脚下にあつたのである。旅人の草鞋の間に挟まった小石が生長して来て一の障碍となつた形である。意識すればするほどその石は増大する。この躓きの石が致命的であることは、それが現代語そのものの中に含まれてあるからである。打明けて言へば、現代語に於ける退化した不愉快な数箇の助動詞其他の些細な語詞それである。如何なる天才も之を詩に改鑄するわけにはゆかない。」（「詩の将来について」）。

これは昭和十二年に書かれた文章であるから、これが書かれたときは、白樺派、モダニズム、さらにはプロレタリア運動も過ぎ、中

原中也や立原道造ら「四季」派の詩人たちが活躍していた時代である。有明が詩壇にいた象徴詩の時代は遠い過去である。おそらくこの時代にこれを読んだ者は、古くさい「文語詩人」の堅物が何を述べるか、といった印象くらいのものであったのではないだろうか。確かに有明の象徴詩には、言語を交通させるための「くである」「くする」「くようだ」といった助動詞はない。名詞と最低限の動詞と助詞でできており、形容詞などはほんの僅かのアクセントのみである。これも右の詩「苦惱」を見ても分かることである。試みに頭の中でそうした助動詞をつけてみると、有明詩の「象徴の魔力」がいかに容易く消滅してしまふかが分かるだろう。ただ間違つてもらつてはこまるが、有明詩の「象徴」を解するとき、単にそうした言葉尻の問題、つまり「文語」「口語」の立場の違いだけでとまるのではなく、その背後にある極めて重要な問題が横たわっていることを私は述べたいのである。有明詩は「文語詩」ではなく、「象徴詩」である。この差は何か。即ち「詩」の認識である。これは「近代詩」の総体における「詩」の認識、さらにこの点をつきつめれば「現代詩」総体における「詩」の認識の問題にまで至る。

有明にとって、「詩」とは畢竟「語」それ自体の何者でもなかった。「近代」という時代に増築整備されつつあった「近代日本語」によって詩を書かねばならない宿命にあった詩人が、ましてや「叙情」の資質を欠いたと自省する詩人が、拠り所にすべきところは、そこである。当然ながら同時代の詩人同様に新しい詩語の「開発」に勤しんだが、あの『新体詩抄』からはじまり、森鷗外『於母影』、上田敏『海潮音』などなど貪欲に西洋詩を翻訳し受肉しようとした近代詩人たちの系譜の中で、有明もまたその一人ではあったが、彼ほど「日本語」それ自体に肉薄した詩人はいないと私は考えている。それは翻れば、有明ほど己の「実存」に肉薄した詩人はいなかったということと同義である。なぜなら有明は、

人間存在とはその者の住む国の言語によってしか明るみにされないことを熟知していたからである。つまり有明が詩作の根底に置いた「性欲」でも「官能」でも「死」でもよい、そのような「語」では実は名指すことが不可能な、自己存在のうちに蠢く、無国籍なる女性、神体、屍体へと変転する「像」を、如何に「近代日本語」で「詩語化」するか。そしてその計り知れない「苦惱」に「詩語」でもつていかに打ち勝つか。この一点に有明は生涯を賭けたと言つてもいい。だから有明の「象徴」とは、まさにその「像」を捉えようとしてもどうしても捉えきれずにいる「語」と「語」の摩擦により熾り上がる「実存」の喘ぎの煙のようなものである。同時代にともに闘つた藤村も独歩も泡鳴もみな同じ的を捉えながらも、みな散文へと敗北していった。そこには日々大量生産され、巷に溢れる、助動詞だらけの交通語が待っている。人々は当然彼等の周りに寄つてくるだろう。そこには社会があり、そして「日本」という「国家」があった。

「実のところ私は絶望してゐるのである。詩は滅びると、さういふ声が他からも聞える。私はそれをも素直にうべなふものである。今日の詩は当然散文に吸収されて、或る期間の憩ひを樂しむのも悪くはないと思つてゐる。少なくともさういふ方向に従つて詩が滅びつゝあることを私はむしろ冀うものである。」（「詩の将来について」）

こう有明が書いた直後、確かに詩は滅んだのであった。名だたる詩人たちが「国家」のために戦争翼賛詩を書くのを、どのような思いで有明は眺めていたのであろうか。いや、有明の眼はこれまでも述べたように、もはや古代仏教に伝わる帝釈天の住む宮殿の天井に広がる「因陀羅網」を眺める境地にあつて、世間の詩人の動向などには興味もなかったかもしれない。いずれにせよ、その心眼は見事である。

そしてこの問題は「現代詩」もまた引きずらざるを得ない。なぜならここにも「現代日本語」で書かねばならない宿命があるからである。企業や社会、国家のために生産される「現代日本語」を「疑い」、切り裂き、そして己の「実存」を疑い、そして切り裂き、己の詩語の修練を絶やさないこと。しかしそれは「苦悩」以外のなものでもない。なぜならそのような者には、社会も国家も刃を向けるからである。しかし私はその「苦悩」の詩を見つけたら、私自身の「苦悩」として愛そうと思う。むしろそのような己の「実存」を切開する「詩語」の刃を納め、散文Ⅱ世俗の海へと泳ぐ「憩い」は有明の言うように悪くはないかもしれない。そのような詩人はあまたいる。あるいはキャッチコピーと何ら変わらぬ詩が世に溢れることは、単に「国家」の言語として人々に消費されるものとしては喜ばしいとも言える。余談だが最近テレビで人気アーティストグループEXILEが踊りながら歌っているのを呆けて眺めていたら、「……明けられない夜はない……」というフレーズが入った歌詞を歌っていた。そのとき和合亮一氏が書いた歌詞かと一瞬本気で疑ったが、いずれにせよ、これは有明にしてすでに「滅んだ」とされる詩である。これに対して人は言うだろう。世に広がらない詩などなんの意味があるのかと。

有明はこう言うだろう。

「わたくしは無義の義なる一心言語の、國語の統ぶる法界に帰依する。」（『有明詩集』序）。
恐るべしである。これはもはや「実存」が解体されたのちの、「不在者」としての言葉である。やはり詩は滅んだのである。

confidence

鳥の餌箱をつくってみた。郵便受けにしていた箱にちよつと手を加えただけのものだが。三日目の今日から小鳥たちが集まってきている。餌はひまわりの種。米粒も混ぜてみた。すずめが食べるんじゃないかと思つて。前の林から、コガラなどが飛んできてついでにいます。そのうち、部屋の窓からよく見えるところに、本格的なのを作ろうと思つてる。(木村)

あんなに苦しかった父の介護も離れて暮らせば忘れてしまつていきます。施設の存在はありがたいです。週刊誌に、春やすこさんが「こんなにしてたら、私、お父ちゃんのこと殺すかもしれへんから、行つてほしい」と施設のお泊りを勧めたことが書かれていました。殺すかも……なんてことを素直に語れるのはすごいな。妙に共感して救われたような気持ちになりました。(福島)

先日、田中庸介さんに誘つてもらつて、10年ぶりくらいで朗読会に行つた。会場が日吉の慶応大学で自宅からとても近かつたからだ。オーブンマイクで飛び入り参加できるというので、この号に載せていただいた「として」を持つていった。アメリカからのお客さんとしてジェフリー・アングルスさんが来られるというので、英訳も持つて行つたのだが、ジェフリーさんは日本語がきわめて堪能な方だったので(無知は恐ろしいことだ)、無駄と言えば無駄だった。まあ、初めて英訳ということをしてみただけ、恥を顧みずそちらも発表しようという魂胆である。朗読会は、学生さんたちが頑張つて盛り上がった。1人の時間を短くして、大勢を登壇させるのがいい。(長尾)

【承前】ガールフレンド(以下カミさん)が、

僕の詩集の刊行を「2年ほど先」に設定しました。僕の頭の中では、来年の夏に刊行を予定していましたので、この設定は、それほど小さくはない決定でした。しかし、この設定について、僕はカミさんを問いたですことはしませんでした。きっと、何か他に、たいせつな用事があるのでしょうか。僕はただ、賢明なカミさんの決定に、諾々と従うのみです。世界は、カミさんを中心に回っているのですから。(野村)

もう何年も前からずっと気になっていることだが、仕事でクタクタになった状態で帰途に就き、ようやくいつもの乗換駅に着いたタイミングで、その直前もしくは直後に人身事故が発生していることが分かり、電車が運転を見合わせている、という事態に出会すことが少なくない。最近は何回かはきかず、多いときには三回くらい、そういった場面に遭遇する。私自身も含めて、居合わせた通勤客は皆、一様に黙つて振替輸送の別社線に乗り、あるいはその乗換駅に留まつて、事故処理の終了と運転の再開を待つているしかない。もちろん、そういう理不尽な足止めを食らつても、誰一人文句を言う者はいない。身近な所で経済的に、あるいは精神的に行き詰まった者が死を選んだことを知り、それが「たまたま自分や親族や知己ではなかった」ことを認識して、沈痛な面持ちで事態をやり過ごすしかないからだ。過酷な現実には、何も震災や原発の周辺だけにある訳ではない。(秋川)

今度の一月で四十歳になる。四十にして迷わず、というが、迷いは深まるばかり。酒量も増えるばかり。最近では伊東静雄の詩がいやに沁みてくる。「——この手の中の

ともしびは／あゝ僕らの「詩」にそつくりだ／自問にたいして自答して……それつきりの……」（「帰路」）。沁みる。（中村）

今年も早や師走となった。さまざまなことの多い一年であった。一番大きな出来事は9月に安部公房フアンのための月刊誌もぐら通信を刊行（敢行ともいいたい）したことです。わたしの言葉が確かに斯界の有識者や研究者たち、また読者たちに届いているのを見ると、逆にわたしがいかに安部公房を読んできたのかということ、今更ながらのように思わせられます。ご興味のある方は、次のアドレスにて11月号をダウンロード：<http://upub.jp/books/8532>（岩田）

第三詩集となる「麒麟の角」を刊行いたしました。今夏は「福岡ゴエイチ」という、福岡で開催された詩誌の即売会と、「東京ポエケット」へ参加いたしました。そこで各地の詩人さんたちと交流したことがよい刺激となり、第二詩集「すみっこのふわふわ」、第三詩集「麒麟の角」と、比較的速いペースで刊行することができました。他、直近では、総合文化同人誌・遡【マゼンタ号】へ短歌を、季刊26時第5号へ詩を寄稿させて頂いております。来年は実妹と共同で歌集を制作する心づもりしております。よろしく願います。（吉田）

「初唐の華美な詩風を一変させ、李白・杜甫の先駆となった詩人」（前野直彬・岩波文庫・唐詩選下）と言われる、陳子昂の面白い逸話。

陳子昂がまだ売れない詩人であったころの話だ。彼は長安の町で、胡琴が百万といわれる値段で売り出されている店に向くと、それを即座に購入した。金持連中も連日つめかけていたのだが、果たしてこの胡

琴がこんなに高い価値があるかどうか測り兼ねていたのである。

みんなは驚いて、陳子昂に問う。「何用之」なんぞこれを用ふる、どうしてこれが必要なのか。陳は「余はこの樂を善くすと答える。そこで物好きな男が、「可得一聞乎」と、書き下せば「一聞を得べきか」とたずねる。陳はOK、自分の家の住所も教え、あなたたちみんなを招待します、いやあなたたちの友人で著名な人々、そういう人々も是非連れてきてください、と。

翌日、百人余りの都の名士たちが陳の邸宅に集結した。山海の珍味でご馳走する。宴席の盛り上がったところで、陳は件の胡琴を抱え弾くかと思いきや、それを叩き割る。こんなものは賤しいものの仕事、蜀人（シヨクヒト）である私の本業は詩人である。詩文百巻を従者に担がせ、それをすべての参会者に配りながら言うには、上京して幾年、都を奔走するも、わが詩業はあがらず、塵土のなかにろくろくとして埋もれるばかり、……どうぞこれを読んでください。一日の内に彼の名声は輝くものになった、というエピソードである。

これがいい話かどうかはわからないが、この用意周到のパフォーマンスは褒めていいだろう。博打を彼はうったのだが、それが当たったわけだ。しかし、その博打も、彼の詩が凡作であったなら、なにをかいわんや、ということになる。

金天方肅殺（金天 まさに肅殺）

白露始專征（白露 始めて專征す）

王師非樂戰（王師は戦いを樂しむに非ず）
之子慎佳兵（この子 兵を佳くするを慎め）

（以下省略）

これは五律の作品で、戦いにゆく友人の送別である。いたずらに、功名なぞけちな

ことを求めるな、というのが全体のテーマである。先の逸話とは矛盾するようなところが、詩と逸話の違いでもある。注釈によれば、「之子」とは呼びかけのことばで、「詩経」にしばしば用いられるとある、この子と訓む。「佳兵」は「老子」に「それ佳兵は不祥の器なり」とあり、このんで兵を動かしたがるという意味があるという。まさに「不祥の器」である。「王師」は天子の軍隊、正義の軍の意味。「軍」好きの暴走老人一派に聞かせたいところ、もちろん陳子昂先生の知るよしもない現在の「中国」のそれにも。

金天方肅殺とは「今しも秋、万物の枯れはてる季節」という意味である。こういう激烈な詩句に出会うと、いや激烈ではなく、漢詩においては普通の言いまわしであろうが、私はちょっと背すじを伸ばしたくなつた。戦いのときが始まったというわけではないが。(水島)

心身疲弊も極みに来ると、あれほど食べ物のようにだつた音楽が、恐怖の対象に変わることを知った。すこしだけ楽になつて来た時、録つてあつたビデオで小澤征爾のリハーサルを観た。

「トロンボーン！ マキシマムツ！！」
病上りのセイジは恐くなかつた……。

Jeanne Darc Au Bucher は、アルチュール・オネゲル作曲、オラトリオ『火刑台上のジャンヌダルク』。(和田)

先日、妻に付き合つて、国立新美術館に日展を見に行った。さして気も進まなかつたけれど、妻は昔から、その書の展示と日本画の展示には欠かさず行つていて、いわば習性になつて居るのだ。それにしても昭和の大家たちが居なくなつてからこつちとくに日展のような公募展は非道いことになつているとの感を深くした。旧態依然と

いえば聞こえはいいようだが、まるで「絵のような景」を絵に描いたつて何になる、と首をかしげたくなる作が大部分を占めている気がする。うまいねえ、精緻だねえ、写真のようだねえ、という感想はあつても、だから何を言いたい？ という点が実に不明である。もつと単純に、たとえば仏像をモデルにしたものが多かったけれど、そのみほとけのお顔立ちがまるで描けていない。骨格の確かな表現力は格段に落ちて、下品なのだ。こんなことは明治近代以来ありえなかつたことだ。そんな作品群の間を彷徨いながら、ある日本画の前で足を止めた。東京新聞の文化欄の美術評で日展中たつた一点、高く評価されていた作品だと記憶していた。岩田壮平という人の「フォルトゥーナの後髪 (This same flower that smiles today, tomorrow will be dying)」というタイトルのものだ。フォルトゥーナとはローマ神話中の幸運の女神のことで、彼女には前髪しかなく、後ろ髪はない——つまり一度逃した幸運は二度とつかまえられない、という寓意をふくんでいる。作品は二枚組構成となつていて、基本的にモノクローム。上部にはうずくまつて煙草を指に挟んでいる、ストライプ柄の服を着た若者と、右端に色鮮やかな紅い花、もう一方の下の絵は、若者の肉身はすでにひとかたまりの染みにすぎなくて、その横に同じストライプの服の痕跡と、上の絵と同じ右端の位置にすでに色褪せ枯れ始めている花の形骸が表現されている。一種のコンセプトチュアルアートと言えなくもないが、絵と英文の副題を見たとき、深くこみ上げてくるものがあつた。われわれは、すでにあの三月十一日を体験してしまつたのだと。機会詩だの震災詩だのおぼめく衆の自閉とは、おのずから異質な境だと思ふ。(倉田)